名城大学人文紀要　第113集（52巻２号）2016年12月
名城大学人文研究会　抜刷

英国メディアでのムスリム難民申請希望者の語られ方
―英国の新聞の投書欄の批判的言説分析―

溝　上　由　紀

論　文

英国メディアでのムスリム難民申請希望者の語られ方
―英国の新聞の投書欄の批判的言説分析―

溝　上　由　紀

1．はじめに

英国の元外務相で、国際救援委員会現会長の D. ミリバンドが、“This was the year the global movement of people fleeing conflict finally burst onto the world’s political agenda.[1]”（紛争から逃れてくる人々のグローバルな動きが、ついに世界の政治的検討課題となった年だった）と2015年を振り返ったように、この年、紛争や迫害を逃れてシリアを中心とした中東地域からヨーロッパに到達する大勢の難民申請希望者（asylum seekers）の問題が世界のメディアで大きく取り上げられた。難民申請希望者とは、出身国を逃れ他国で難民としての地位と保護を求めている人々のことで、EU 統計局によると2015年の EU 加盟国への難民申請数は、過去最高の125万人を超え、その出身国はシリアが約３割を占め、アフガニスタンやイラクがそれに続く。このことは難民申請希望者の多くがイスラム教徒であることを意味し、この人々の群れは、「イスラム教徒襲来」の強烈なイメージをヨーロッパの人々に植え付けた（三井、2015）。2016年現在もヨーロッパが直面する、解決が見られない大きな課題の一つになっているこの難民問題発生の最大の要因は、2011年に始まり現在も続くシリア内戦であるが、紛争が続き安定や平和が見通せない状況の国々は中東やアフリカに他にもあり、これらの国を脱出し、地中海を船で渡るなどしてヨーロッパ沿岸部のギリシャやイタリアに到達した人々は、多くが経済状況や雇用環境が良いドイツや英国など北ヨーロッパでの定住を希望していると言われる。EU はドイツを中心に加盟国で難民の受け入れを分担しようと模索してきたが、とどまることのない難民の流入への危機感から、2016年３月に難民政策を転換して、ギリシャに不法入国した人を強制送還することにし、流入を当面抑制する方向に舵を切った。

このような状況の中、オックスフォード大学難民研究センター長の A. ベッツによると、ヨーロッパでは近年、難民に関する世論が二極化しており、その一極は少数だが難民受け入れの賛成派で、もう一極は極右的な反移民・難民派で、こちらが勢力を増しつつある（『朝日新聞グローブ』2016年２月21日号）。反対派の勢力の強さの一端は、例えば2016年６月23日に行われた英国の国民投票で EU 残留派と離脱派の間で移民・難民の受け入れの問題が大きな争点の一つとなり、結果、離脱という結論に至った事実や、フランスや北欧諸国などヨーロッパで移民嫌い、とりわけイスラム嫌いの極右政党が台頭している状況などに垣間見ることができるだろう。

上述の2016年３月のEUの難民政策の転換以降に報道量は激減したが、英仏海峡トンネルのフランス側の国境の港町カレーでは、英国行きを望む数千人におよぶ難民申請希望者がキャンプを形成して、一時期劣悪な環境の中で滞留していた。[2] 彼らのような難民申請希望者の多くに定住先として望まれている英国の一般の人々は、命がけで国を逃れてくる彼らの受け入れに関してどのような考えを持ち、また彼らに対しどのようなイメージを抱いているのであろうか。本稿では、英国内で発行された新聞におけるLetters to the Editor（投書欄）に注目し、短い手紙文の中で読者によって簡潔に語られた難民受け入れをめぐる言説を分析することで、現在の英国の一般の人々の難民申請希望者に対するイメージに近いものを探り、またどのような言説構造のもとでそのようなイメージが構築され再生産されていくのかということについて考察することを目的とする。

ところで英国への移入を希望するのは、シリア等から紛争を逃れてくる難民申請希望者だけではなく、より良い仕事や生活を求めて祖国を後にする移民や経済難民と呼ばれる人々も多い。EU離脱の是非を問う国民投票に際しては、EU域内のより貧しい中・東欧の国々からの移民に英国内の労働者の仕事や社会保障予算が奪われているとの言説が離脱派により特に強く主張されていたが、本稿が今回注目するのは、これらの移民のことではなく、昨年以来大きな社会問題となっている、シリア等の紛争地から逃れ英国で暮らすことを求めるムスリム難民申請希望者の問題である。

さて、新聞などのマスメディアの言説は、社会で「常識」、「事実」、「共通認識」とされるものを生産し再生産するのに主要な役割を果たすが、それはすなわちメディアが伝える「合意された」見方が、現状を維持している主流の価値観や考え方に合致しているということを意味する（Lynn &Lea, 2003）。換言すれば、メディアの言説は、ある特定のグループへのネガティブな、あるいはステレオタイプ的な見方を構築し、維持するのに大きな役割を果たしているということでもある。

新聞の投書欄は、一般の読者が公に自分の考えを発表できる貴重な場であるが、掲載される投書は、数多くの投稿の中から、各新聞によって異なる政治的立場や編集方針、商業的観点に照らして選択され、改訂され、理に適ったコメントとして提示されたものであるし（Richardson, 2001, 2013）、選ばれるためにはそのときに注目されている問題に関連することを、簡潔、文法的に正確、かつ説得力を持って書くなどの一定の論述能力が必要であり、結果的に年齢層が比較的高く、政治的には保守で、社会的・経済的階層が高く、教育程度の高い白人中産階級の男性がより書き手となりやすい傾向があるとされる（Richardson, 2007; Wahl-Jorgensen, 2001, 2002）。このような意味では投書欄は必ずしも一般市民の代表による多様な意見を反映しているわけではなく、各新聞の一部の読者層の議論を反映しているにすぎないという見方もできるだろう。それでもなお投書欄は、一般の人々の日常の言説と、メディアによって調停された

言説の交叉により出来上がるものとしての独特の意味を持つとともに、ある新聞がその新聞自身とその読者層をどう認識しているのか、そしてその新聞における「われわれ（We）」の位置から排除される個人やグループをどう認識しているのかを知るための重要なソースである（Richardson, 2001; Richardson & Franklin, 2003）。すなわち、ある新聞の投書欄の言説に反映された偏見や人種差別は、そのような差別的な実践がどの程度までその新聞の主流の読者層から普通のこととして見られているかを示す指標であるといえ（Essed, 1991）、その分析は日常に根付く差別的視点の可視化をはかるという意味で意義があると考える。

Lynn & Lea（2003）は、2001年３月から12月の期間の、英国の新聞の投書欄における難民申請希望者をめぐる言説を検証し、‘new Apartheid’（新しいアパルトヘイト）がメディアの言説により作られようとしていると指摘しており、当時すでに移民や難民申請希望者に対する差別的な言説が流布していたことを示した。1990年代以降クルド難民、コソボ難民、ソマリア難民などいくつか難民問題が起こったが、その論考においては、難民申請希望者は被差別集団としてひとまとめに取り上げられ、その民族的・宗教的出自には深く言及されていない。パナイー（2016）によると、英国は過去200年間、常に移民の国であったが、人種差別や外国人嫌悪も同時に存在し、その被害者は、19世紀のアイルランド人、20世紀初頭のユダヤ人、第一次世界大戦時のドイツ人、1950年代の西インド諸島人、1960年代から1980年代のアジア人、1990年代の難民申請希望者、そして21世紀、特に2001年９月11日以降のムスリムというように時とともに変遷し、メディア等を通して表出される他者への敵意はある特定の時期にある特定の集団に集中してきた。そうであるならば、現在のシリア等からの難民申請希望者をめぐるメディアの言説の分析は、集団としての難民申請希望者への差別の問題と同時に、イスラム嫌悪の文脈にも引き寄せて検討されなければならないだろう。

２．分析の方法

ヨーロッパでの難民申請希望者の問題が大きく注目されたのは2015年であったため、本稿ではその前後年の2014年１月1日から2016年６月30日までの投書欄を分析対象とした。2016年６月30日の時点で、データベース Infotrac Newsstand を用いて、英国ロンドンで発行された、すべての高級紙と大衆紙における Letters to the Editor を対象に、‘asylum seekers’ をキーワードにして検索を行った。検索の結果、高級紙 *The Daily Telegraph*（以下 DT）、*The Times*（同 Times）、*The Guardian*（同 Guardian）、*The Financial Times*（同 FT）と、日曜発行の大衆紙 *The People*（同 People）において、合わせて99件の投書が検出された。筆者はこのすべてに目を通し、分析対象を以下の３つの条件に当てはまるものに絞った。それは、１、難民受け入れの当事者となる、英国在住の英国人と思われる書き手によるもの、２、シリアを中心とした紛争地域出身の難民申請希望者の英国への受け入れに関して言及していると思われるもの、３、英国の一般の人々の難民申請希望者に対するイメージを掴むことを目的とするため、外交の専門家、難

民受け入れの専門家や政治家など、難民問題に関連する特定のプロフェッショナルな肩書を明確にした上で書かれているものではないもの、の３つである。結果、分析対象の投書は67件となり、その内訳は、DT 47件、Times 11件、Guardian ３件、FT ４件、People ２件となった。英国で高級紙として発行部数が１位と多くの読者を持つ右派系新聞である DT の件数が他の新聞の件数を大きく上回っている理由は、DT が伝統的に保守層を読者としてきているため、ナショナリズムの観点から難民問題に危惧を抱き、意見を投稿した読者がより多かったとも推測できるし、DT 編集部が特定の編集方針のもとで、特にこの問題に関する投書を手厚く掲載したということも推測できよう。次章以降ではこれらの投書の分析と考察を行っていく。

３．分析と考察

難民申請希望者について書かれた投書の分析は、次の２つの観点から行った。１つは、シリア等からの難民申請希望者の英国への受け入れに関して、それぞれの投書の言説が賛成あるいは反対のどちらの立場から書かれていると推定されるかという観点、もう１つは、それぞれの投書の書き手が難民申請希望者についてポジティブかネガティブかどちらのイメージを持っていると推定されるかという観点である。次の表は、その観点に基づいて筆者が投書を分類し、集計した結果をまとめたものである。ところで、これらの投書は、難民申請希望者の英国への受け入れに賛成か反対かという質問に直接答えたものではないため、中には難民受け入れに関して直接的にも間接的にも賛成も反対も表明しておらず、書き手の考えが推測不可能なものもあったし、難民についてのイメージが特にポジティブともネガティブとも判定できないものも少なからずあった。それらの場合は便宜上、不明・その他という分類にしておいた。

まず男女の内訳であるが、分析対象とした投書の書き手は、男性が50人、女性が12人、イニシャルのみで名前を表示してあるなどの理由で男性か女性か判別不可能だったものが５人であり、顕著に男性が多かった。これは先述したように意見を投稿する層にもともと男性が多いということの反映なのか、掲載用に選択された投書の書き手に結果的に男性が多かったということなのか不明である。なお、各投書の最後に、氏名と居住地は必ず書かれているが、年齢は書かれていないため書き手の年代は不明である。

掲載年であるが、2014年が８件、2015年が57件、2016年が２件と、掲載数は2014年に比べ2015年に大幅に増加している。2015年に難民申請希望者が大幅に増え、その問題が前年よりもマスメディア等で世界的に話題になることが多かったという社会情勢を考慮すると、この問題に関する英国一般市民の関心が2015年により大きくなって投稿数が増え、それが掲載数に反映されたと考えられるだろう。2016年の掲載数が半期分とはいえ少ないように見受けられるのは、３月に EU が難民抑制の方向に動いたことなどから、報道量が前年より減少したことや、時間の経過により人々の関心が自然に減少したなどの影響が出ている可能性があるかもしれない。

英国での難民申請希望者の受け入れに関しては、全新聞をトータルすると、賛成（条件つき

表　投書の分類・集計結果

新聞名	男女内訳（人）		発行年と掲載数（件）		英国への難民申請希望者受け入れについて（件）		難民申請希望者のイメージ（件）	
Daily Telegraph	男性	38	2014年	1	賛成（うち条件つき賛成）	13（2）	ポジティブ	5
	女性	7	2015年	44	反対（うち条件付き反対）	22（1）	ネガティブ	28
	不明	2	2016年	2	不明・その他	12	不明・その他	14
Times	男性	7	2014年	0	賛成	8	ポジティブ	3
	女性	3	2015年	11	反対	1	ネガティブ	3
	不明	1	2016年	0	不明・その他	2	不明・その他	5
Guardian	男性	2	2014年	2	賛成	1	ポジティブ	0
	女性	1	2015年	1	反対	0	ネガティブ	0
	不明	0	2016年	0	不明・その他	2	不明・その他	3
People	男性	0	2014年	1	賛成	0	ポジティブ	0
	女性	1	2015年	1	反対	2	ネガティブ	2
	不明	1	2016年	0	不明・その他	0	不明・その他	0
Financial Times	男性	3	2014年	4	賛成	2	ポジティブ	2
	女性	0	2015年	0	反対	2	ネガティブ	2
	不明	1	2016年	0	不明・その他	0	不明・その他	0
計	男性	50	2014年	8	賛成（うち条件つき賛成）	24（2）	ポジティブ	10
	女性	12	2015年	57	反対（うち条件付き反対）	27（1）	ネガティブ	35
	不明	5	2016年	2	不明・その他	16	不明・その他	22

賛成２件を含む）が24件（36%）、反対（条件つき反対１件を含む）が27件（40%）、どちらの立場か不明のものが16件（24%）であった。ヨーロッパで難民問題が大きな社会問題となり、社会不安から右傾化やイスラム憎悪が強くなっていると報じられる中で、反対派がもっと多いとも予測されたが、結果は、反対が賛成を若干上回ってはいるものの、賛成派と反対派の数にそれほど差はないというようにも見える。しかしこの数字上の拮抗は必ずしも正確に世論の状況を反映しているとも限らない。編集側が、各社の編集方針に基づき、掲載する投書の言説の賛否のバランスを斟酌したとも推測できるからである。掲載数が多い新聞を個別に見ると、DT では、賛成が28%、反対が47%、不明が26%となっていて、反対派がかなり多く、Times では、賛成が72%、反対が９%、不明が18%となっていて、賛成派が顕著に多い。この傾向も各新聞の編集方針や読者層を把握する参考にはなるかもしれないが、編集側による選択が行われていることを前提とすると、必ずしも世論の状況を反映しているとも言えない。それゆえ、各新聞に掲載された投書のうち、賛成の言説と反対の言説がいくつあったかという数値は単なる参考と捉え、数値ではなく、賛成・反対の根拠として述べられている理由に注目し、それらを次節でいくつかのパターンに分類しながら詳しく提示していきたい。

一方、難民申請希望者に対するイメージであるが、ポジティブなものが10件（15%）、ネガティブなものが35件（52%）、不明のものが22件（33%）と、DT を中心に、ネガティブなイメージ

を語る言説が顕著に多かった。これに関しても、編集側の選択が行われているため、この比率が直ちに難民申請希望者に対する一般の人々の考えを反映しているとは必ずしも言えないのは先ほどと同様である。難民受け入れに賛成と推定される書き手で、難民に対してネガティブなイメージを表明した人はいなかったし、難民受け入れに反対と推定される書き手で、難民に対してポジティブなイメージを表明した人はいなかったが、これは想定内であろう。ポジティブなイメージを語った投書が少なかったのは、難民受け入れに賛成と思われる人全員が彼らに対してポジティブなイメージを語ったわけではないということを意味し、一方で、ネガティブなイメージを語った投書が多かったのは、難民受け入れに反対と思われる人々に加え、難民受け入れに賛成か反対か不明だった人も、彼らに対するネガティブなイメージを語ったケースが何件も見られたためである。ネガティブなイメージを語った言説の中には、人種差別や宗教的偏見に基づいた論理立てが散見された。これらの差別的な言説が生産・再生産されることで難民申請希望者のネガティブなイメージが構築され、再生産され、強化されていくと考えるとき、これらの言説を詳細に分析し、そこに内包された差別的視点やイデオロギーを可視化させ、言説構造の問題点を指摘することは意義がある作業だと思われる。次節以降で難民申請希望者に対するポジティブなイメージとネガティブなイメージとしてどのようなことが語られているのかを提示し、その後、特にネガティブなイメージを語った象徴的な言説について詳細な分析と考察を加えたい。なお、各投書には日本語訳をつけてあるが、誤読誤訳の責任は全て筆者に帰するものである。

3.1. 英国への難民申請希望者受け入れに賛成・反対する理由

ここでは、英国への難民申請希望者の受け入れに賛成、あるいは反対する理由としてどのようなことが述べられているかを提示していく。

3.1.1. 英国への受け入れに賛成の言説

英国への難民申請希望者の受け入れに賛成していると思われる言説において、賛成する理由を分類すると、３つのパターンに大別された。パターン１は、助けを求める人々は救わなければならないという道義的責任を主張するもの、パターン２は、英国は寛大に難民を受け入れてきた伝統があると主張するもの、パターン３は、受け入れによる国益を主張するもの、である。パターン１は、例えば次のようなものである。

(1) Migrants who have risked their lives to make it to Europe and to escape from intolerable conditions should be made welcome . . . (Larry Thompson, Holywood, Co Down, Times, Aug. 3, 2015)

（ヨーロッパに辿り着いて耐え難い状況から逃れようと命を懸けた移民は、歓迎されるべ

きだ。）

(2) These are people who deserve our help, asylum and sanctuary. (Ruth Sober, London, DT, Sep. 5, 2015)
（彼らはわれわれの助け、保護、避難所を与えられるに値する人々だ。）

(3) [I]sn't it time to have a grown-up debate about the obligations of human decency, based upon instincts and attitudes to which humane people everywhere subscribe? (John Tissier, Stanmore, Middlesex, DT, Sep. 23, 2015)
（あらゆる場所の慈悲深い人々が同意する本能や態度にのっとって、人間的作法の義務についての大人の議論をする時ではないか。）

(4) If we are a morally responsible nation . . . we must respond with open hearts to those seeking our help. (Margaret Ritchie, Willand, Devon, Times, Sep. 8, 2015)
（われわれが道義的に責任のある国なら、われわれは助けを求める人々に開かれた心で応じなければならない。）

これらは良識ある人々の善意の言説であるのは疑いない。しかしこれらにはともすると、英国は「避難所」で「神聖な場所」でもある 'sanctuary' である一方で、難民申請希望者の出身国は、'intolerable'（耐え難い）な場所であり、かわいそうな難民申請希望者を助けることは、'obligation'（義務）、'morally responsible'（道義的責任）であるとする、「we/they（われわれ英国（人）/ 彼ら難民申請希望者）」という形で英国を二項対立の優位な位置においた、ある意味他者を救済や保護の対象として下に見るような態度も内包されているとみることもできるだろう。

英国の誇り高き伝統に照らし、受け入れないことを恥とみなす、次のようなパターン２の言説にも同様に、英国の文化的優位性を前提に、ともすれば自らを特別とみなし彼らを下として見るような意識が反映されていると捉えることもできるだろう。

(5) We must . . . discuss what our country, with its proud tradition of asylum, will offer Syrians and others. (Patrick Worthington, London, DT, Sep. 12, 2015)
（われわれは、亡命者を受け入れてきた誇りある伝統を持つわが国が、シリア人や他の人々に何を提供できるか議論せねばならない。）

(6) Our politicians should reflect on the generosity of spirit for which the English were once renowned. (John Kennett, Hadlow, Kent, DT, Aug. 27, 2015)
（われわれの政治家たちは、かつて英国人が名高かった寛大の精神についてよく考えるべきだ。）

(7) In 1940 this island accepted nearly 10,000 Jewish children from Czechoslovakia on the Kindertransport trains. Today our stations are closed to refugees. This is shameful. (Bryan K Conery, Whitehaven, Cumbria, DT, Sep. 5, 2015)

（1940年にこの島国は、キンダートランスポート列車でチェコスロバキアからおよそ１万人のユダヤ人の子どもを受け入れた。今日、われわれの駅は難民に対して閉ざされている。これは恥だ。）

上記の２つのパターンの言説には、難民申請希望者の受け入れに積極的に賛成するというよりは、義務、責任、伝統、恥などの名のもとに、冷静に受け入れに賛成しているというトーンが見られるように思われ、その背後には、「彼らより上位にある者」と自らをみなす、英国（人）としてのプライド、白人の責務といったポジティブな自画像があるとも思われる。

以下のパターン３の言説では、受け入れに積極的に賛成していながらも、英国の国益も念頭においていることが伺える。

(8) Can someone with greater IT skills than I please start a national list of citizens who hold a British passport and who are willing to offer accommodation for a Syrian refugee family, to feed and house them temporarily until they can receive a working visa, move on and contribute to our economy. (Helen Beaver, Liverpool, Times, Sep. 5, 2015)

（私より高い IT スキルを持っているどなたか、どうか英国のパスポートを持っていて、シリア難民家族に住むところを提供し、彼らが労働ビザを受け取り、働き始め、われわれの経済に貢献できるようになるまで、彼らを食べさせ一時的に住まわせてもよいと思っている国民のリストを作り始めてくれませんか。）

投書（8）の書き手は、シリア等からの難民を受け入れるべきとの切実な思いは持っているようだが、受け入れの最終目的は、‘our economy’（われわれの経済）に貢献してもらうこと、だと捉えているようでもある。その他、２件あった条件つき賛成の言説においては、受け入れ条件として、‘economic migrants’（経済難民）と ‘genuine asylum seekers’（本物の難民申請希望者）を見極め、本物の難民のみ受け入れるべきだ、との主張がなされていたのだが、その投書のうちの１件では、次のような条件も主張されていた。

(9) Migrants are attracted by our strong economy and generous benefits, so we must insist that they have the skills we require or have jobs to go to. (Edward Pryce, Plymouth, Devon, DT, June 17, 2016)

（われわれの強い経済と、寛大な手当に移民たちは引きつけられる。ならばわれわれは彼らに対して、われわれが要求するスキルあるいは就くべき仕事を持っているべきだとい

うことを強く求めなければならない。）

投書（8）や（9）の言説からほのめかされるのは、困っている人は誰でも手放しで受け入れるという姿勢ではなく、英国に貢献し、英国の利益となりそうな人なら受け入れるという、国益優先の姿勢であり、そこにはナショナリズムが背後にあると捉えられるだろう。

上記の３パターン以外のものとしては、難民を生み出した元々の原因が英国にもあることに言及するものがあった。

(10) After all, we bombed some of them out of their homes in the first place. (Greg Morris, London, DT, Sep. 9, 2015)

（結局のところ、彼らのうちの何人かは、そもそもわれわれが爆撃したことにより家を失ったのだ。）

上記は、パターン１のような困った人を助けるという意味の道義的責任とは異なる次元で、戦争に加担し彼らを難民にした直接の加害責任を贖うために受け入れに賛成しているという意味で括目に値するが、このような視点から書かれた投書は１件のみであった。

3.1.2.　英国への受け入れに反対の言説

英国への難民申請希望者の受け入れに反対していると思われる言説を分類すると、その理由として述べられていたことは主に次の４つのパターンである。パターン１は、英国は国土が狭く人口がすでに多いから受け入れは不可能だと主張するもの、パターン２は、限られた国家予算は難民申請希望者ではなく英国民に使うべきだと主張するもの、パターン３は、受け入れによって英国らしさが失われると主張するもの、そしてパターン４は、受け入れには治安上のリスクがあると主張するもの、であった。パターン１の言説は次のようなものである。

(11) England is already among the most densely populated countries in the world and cannot continue to be an open door. . . Sweden has more than three times England’s land area, with a population of ten million, and Norway has two and a half times our land area, with a population of just five million. England has 58 million and is already experiencing severe pressure in many areas of infrastructure. (Richard English, South Petherton, Somerset, Times, Aug. 3, 2015)

（英国はすでに世界で人口密度が最も高い国の１つであり、ドアを開放し続けることはできない。スウェーデンは英国の国土の３倍以上の面積を持ち人口は１千万人だ。またノルウェーは、われわれの国土の2.5倍の面積を持ち人口はたった500万人だ。英国は人口5800万人ですでにインフラの多くの部分が深刻に逼迫している。）

(12) Many large EU member states, including Germany and Poland, face depopulation from

emigration and declining birth rates. With an uneconomic ageing population, Germany's willingness to absorb nearly a million migrants over a year is economically beneficial. The migration debate must take account of the huge disparity in population density. Germany and Poland could each absorb 60 million migrants and yet remain less densely populated than the United Kingdom.（Philip Duly, Haslemere, Surrey, DT, Sep. 5, 2015）

（ドイツやポーランドなどの多くの EU 大国は、移出や出生率の低下により人口減に直面している。不経済な高齢人口を抱えるドイツが、１年で100万人近くの移民を進んで受け入れようとするのは、経済的にメリットがあるからだ。移民の議論は、人口密度の多大な不均衡を考慮すべきだ。ドイツやポーランドは、それぞれ６千万人ずつ移民を受け入れても、まだ英国よりも人口密度が低い。）

投書（11）や（12）のような、英国は人口密度が高いから難民申請希望者を受け入れられないとの主張は、数値などに基づく事実というよりも書き手自身のイデオロギーや価値判断をその論理的根拠としている。これに類する言説においては、しばしば、英国以外の他国で彼らを受け入れるべきだという議論が抱き合わせに主張されていた。難民申請希望者の問題は解決すべき社会問題という認識はあるが、自分たちでは引き受けられないという姿勢だ。受け入れるべきとされた国は、上記のように EU 諸国であったり、中東諸国であったり、投書によってさまざまであった。

パターン２の言説は、難民申請希望者を受け入れることによって英国人が被った、あるいは今後被るであろう不都合について言及する。

(13) The official net migration figures make worrying reading. At this rate, we would need to build a city the size of Birmingham every three years just to house the migrants, while providing support services, transport and jobs. (Roger Bellamy, Chipping Norton, Oxfordshire, DT, Aug. 28, 2015)

（公式発表された純流入数について読んで心配になる。このままだと、われわれは移民にサポートのためのサービスや交通費や仕事を与える一方で、彼らを住まわせるため、バーミンガムのサイズの都市を３年ごとに建てる必要があるだろう。）

(14) Despite 50,000 families being relocated by London boroughs to areas outside the capital on the grounds of lack of funding and high rents, London councils are now proposing to accept thousands of refugees. Where will they be housed? And will their children take up the school places that the children from the relocated families have vacated? (Gillian Tweed, London, DT, Sep. 12, 2015)

（資金不足と高額な賃料を理由に、ロンドン自治区により首都の外の地域に５万家族が移転させられたにもかかわらず、ロンドン自治体連合は現在、何千人もの難民の受け入れを提案している。彼らをどこに住まわせるのか？彼らの子供たちは、移転させられた家

族の子供たちが空けた学校の席を手に入れるのか？）

(15) I was angered to read in last week's Sunday People that supermarkets have raked in PS44million from Home Office prepayment cards designed to help penniless asylum seekers buy food and clothes. My son is penniless. He left uni with a good degree but can't find a job and is too proud to sign on. It annoys me that asylum seekers are handed out freebies galore. (Dee Culworth, Huntingdon, Cambs, People, Nov. 23, 2014)

（先週の Sunday People で、一文無しの難民申請希望者が食料や衣服を買うのを助けるために発行された内務省の先払いカードで、スーパーマーケットが4400万ポンド儲けたという記事を読んで腹が立った。私の息子は一文無しだ。彼は大学を良い成績で卒業したが、仕事を見つけられず、プライドが高すぎて就業契約ができない。難民申請希望者がたくさんの無料サービスを与えられていることに困惑する。）

これらの言説では、「we/they（われわれ英国（人）/ 彼ら難民申請希望者）」という二項対立の構図が明確に示され、他者である難民申請希望者の受け入れは、それと引き換えに英国人の生活に多大な不都合を強いるものだとの主張がほのめかされている。困っている英国人がいるのに、国や自治体はなぜそれを差し置いて他者を助けるのかという不満が述べられ、限られた予算は他者のためではなく、自分たちの仲間のために使うべきではないかという、自国民中心の論理が見て取れる。しかし実際には、これらの議論に明確な根拠は見られない。投書（13）では、バーミンガムはパキスタン系やバングラデシュ系のムスリム移民等が集中している都市なので皮肉的に引き合いに出されたと思われるが、その主張は現実味に欠けるし、ロンドンに受け入れる難民の住居や学校について投書（14）で述べられることも、あくまで憶測にすぎない。投書（15）でも、難民申請希望者に無料の社会保障が与えられていることと、投書の書き手の、大学卒の息子が仕事を見つけられないことに直接の因果関係があるとは言えない。それなのにあたかも自分たちが被る不運や不都合を難民申請希望者のせいだと述べるかのような言説が流布されることは、彼らに対する憎悪を煽ることにつながりかねないだろう。これらのような言説は、3.2.2. 節や3.3.1. 節においていま少し詳しく言及するように、難民申請希望者は社会保障の不当な受給者である、というネガティブなイメージの形成に密接につながっていると思われる。

パターン３の言説は、シリア等からのムスリム難民申請希望者をその人種的・宗教的属性ゆえに露骨に他者と見なし、他者を受け入れることで、英国のアイデンティティや文化が失われることを危惧する。

(16) Sunni countries, headed by Saudi Arabia, should take in Sunni refugees. Shia countries, headed by Iran, should take Shia refugees. Christian countries should then take Christian refugees. (David

Rose, Brighton, East Sussex, DT, Sep. 3, 2015)

（サウジアラビアに代表されるスンニ派の国々がスンニ派の難民を引き受けるべきだ。イランに代表されるシーア派の国々がシーア派の難民を引き受けるべきだ。それで、キリスト教の国はキリスト教徒の難民を引き受けるべきだ。）

投書（16）の言説では、シリア等からの難民申請希望者は、そのほとんどがイスラム教徒という他者であるため、キリスト教国である英国で受け入れる必要はないとの主張がほのめかされている。

(17) The European Commission's encouragement of migrants from Syria, taken with the free movement of people within the EU, appears to be another means of eroding statehood, national identity and culture in European nations. . . Britain should maintain its distance and its independence, and thus preserve its national identity. (Alexander Stilwell, Godalming, Surrey, DT, Sep. 12, 2015)

（欧州委員会が､EU内の自由な移動を伴うシリアからの移民の受け入れを奨励することは、ヨーロッパの国々の国家とアイデンティティと文化を侵食する別の手段のようだ。英国は、距離をおき、独立を維持し、国のアイデンティティを保持すべきだ。）

投書（17）の言説も、シリアからのムスリム難民申請希望者を受け入れることにより、多文化化が進み、書き手があるべきと考える英国らしさが失われると暗に主張している。人種や民族や宗教の違いを認め合いながら併存する多文化主義の社会の実現が目指されている今日の英国において、少数とはいえ現在でも（16）や（17）の投書のような多文化共生の理念とは正反対の、キリスト教中心、白人中心、自国民中心の、他者の排除の論理が高級紙上で語られていることは特記しておくに値するだろう。

パターン４は、以下のように受け入れには治安上のリスクがあると主張するものである。

(18) It's extremely worrying indeed that Islamic State terrorists may be sneaking into Europe by mingling with boatloads of refugees. (Jeena Sumner, North London, People, Aug. 2, 2015)

（イスラム国のテロリストがボートに乗った難民に混じってヨーロッパに入り込むかもしれないことが、本当にとてつもなく不安だ。）

このような言説においては、強いネガティブイメージそれ自体が受け入れ反対の論拠とされている。端的に言えば、ムスリム難民申請希望者はテロリスト等の危険人物だから受け入れたくないとの主張だ。このパターンの言説については、ネガティブイメージを取り扱う3.2.2. 節や3.3.2. 節で改めて詳しく言及することにしたい。

上記パターン以外では、難民申請希望者を生み出す原因となっている、シリアやイラク等で

起こっている紛争を、彼ら自身が解決すべき他人事と捉えるような言説が１件あった。

(19) Armies in Syria, Iraq and other countries are short of soldiers to defeat Islamic State of Iraq and the Levant. Able-bodied migrants from these countries should be sent back to fight. This is what all young men in Britain had to do during the Second World War. Women and children should of course qualify for asylum. (Alan Elliott, Sherborne, Dorset, DT, Sep. 3, 2015)
（シリアやイラクや他の国の軍隊は、イスラム国を打倒するための兵士が不足している。それらの国出身の健康な移民たちは、戦いに参加するために国に帰すべきだ。これ（戦争への参加）は英国のすべての若い男性が第二次世界大戦時にやらなければならなかったことだ。女性や子供はもちろん難民申請する資格があるだろう。）

この投書の書き手は女性や子供の難民申請には賛成しているため、条件付き反対として分類したが、男性に関しては英国での受け入れはせず、出身国に帰し戦場に行かせるべきと主張しており、そこには戦場から逃れてきた人々の命に対する人道的視点は見られないうえ、シリアやイラクから難民が続出する大元の原因の一端を英国も担っているという当事者意識も見られない。

3.2. 難民申請希望者に対するイメージ

ここでは、難民申請希望者がどのようなイメージで語られているのか、ポジティブなものとネガティブなものに分けて提示する。その後、ネガティブなイメージを語った２件の投書について詳細に言説分析し、そこに表出されたシリア等出身のムスリム難民申請希望者に対する人種的・宗教的差別について批判的に考察していく。

3.2.1. ポジティブなイメージ

ポジティブなイメージを語った言説は全体では少数であったため、分類することは難しいが、複数あったのは、彼らの出身国内での社会的・経済的地位に言及した以下のようなものであった。

(20) All those alleged benefit scroungers and many of those lingering in the asylum seekers' limbo are people with talents, untapped abilities, or professional qualifications they are prevented from using, sometimes for years. (Sierra Hutton-Wilson, Evercreech, Somerset, FT, Dec. 13, 2014)
（給付金たかりとされるすべての人々と、難民申請希望者として忘れられた状態で放っておかれている人々の多くは、彼らが何年も使うことを阻まれてきた才能や未開発の能力や専門職の資格を持っている。）

(21) Many of those who make the perilous journey are the better-off, who can pay the traffickers,

and the well educated. (Peter Smith, Woking, Surrey, Times, Sep. 8, 2015)
（命がけの旅をしてきた人々の多くは、周旋人に金を払えるほど富裕で、教育程度が高い。）

カレーの難民キャンプでテレビインタビューに答えていた人がしばしば医者や他の専門職だったと指摘した投書もあり、難民申請希望者のポジティブなイメージとして、彼らは高度な職業、資格、お金、学歴などを持っている有能な人々だと述べる言説がいくつかあった。彼らについてこのような文脈のポジティブなイメージが語られること自体には問題はないが、このような職業や才能がある人に対しては良いイメージを持ち、英国の将来に役立つから受け入れてもよいと考えるが、一方で特に専門の資格や才能やお金がないような人々には良くないイメージを持ち、自国に受け入れたくないと考えるといった態度が醸成されることにもつながる可能性もあることは、指摘しておいた方がよいだろう。

その他、次の言説は、過去の出来事を通じて投書の書き手の中に形成された、シリアに対するポジティブなイメージを語っている。

(22) The people of Syria are an ancient and civilised society, and themselves provided asylum for Christian Armenians in the last century. (John Littler, Bristol, DT, Aug. 23, 2014)
（シリアの人々は、古来からの文明化された人々であり、彼ら自身が前世紀にはアルメニア人キリスト教徒を保護してくれたのだ。）

19世紀末から20世紀初頭に起きたアルメニア人虐殺についての言及だと思われるが、そのときにアルメニア人キリスト教徒を助けたとして、シリア人やシリア社会が、‘civilised’（文明化された）という言葉を使って言及されている。多くの言説においてしばしば西洋や西洋人が文明化された人や場所として言及され、非西洋は未だ文明化されていないものとして表象されがちであるのだが、ここではキリスト教徒を保護したシリアが（西洋と同列の）ポジティブなイメージで表象されている。ここでも、キリスト教徒を助けたからシリア人は文明化されている、シリア人は文明化されているから難民申請希望を受け入れるべきだ（＝文明化されていないとみなせる人々は助けなくてよい）、という単純な議論につながる危険性だけは注意しておきたい。

一方、次の言説では、難民申請希望者は、他者ではなく、英国人と同じ人間として言及されている。

(23) They are not the scroungers or benefit cheats that some would have us believe – they are people like us who have fled their homes in terror. (Patrick Worthington, London, DT, Sep. 12, 2015)
（彼らをたかり屋や給付金詐欺師だとわれわれに信じさせようとする者もいるが、彼らはそうではない。彼らは、恐怖で故郷を離れた、われわれと同じ人間だ。）

多くの言説で、ともすれば犯罪者、一文無し、異教徒などの視点から下位の他者として規定さ

れがちな難民申請希望者が、ここでは ‘people like us’（われわれのような人間）として英国人と平等に扱われている。このようなイメージで彼らを捉えた投書が１件だけあった。

3.2.2. ネガティブなイメージ

難民申請希望者の問題については、多くの投書において、‘crisis’（危機）、‘problem’（問題）として、時に ‘overwhelming’（圧倒的な）、‘worldwide’（世界的な）などの形容詞を伴って言及されていた。このことは、難民申請希望者の問題が、解決されなければならないもの、としてネガティブに表象されていることを意味するだろう。

難民申請希望者についての言説から想起されるネガティブなイメージは主に２つのパターンがあった。

(24) [T]he majority of migrants are motivated by the desire to profit from Britain’s economy and benefits system. (Clive Foskett, Headley Down, Hampshire, DT, Aug. 3, 2015)
（移民の大多数は、英国の経済と社会保障制度から利益を得たいという欲望に駆り立てられている。）

上記のような言説や、先述した （13）、（14）、（15）の投書が想起させるような、難民申請希望者は社会保障の不当な受給者である、というイメージがその１つである。もう１つは以下のような、難民申請希望者はテロリスト等の危険人物である、というイメージである。

(25) That he [David Cameron] has now authorised positive action in Syria against those who would bring murder and mayhem to Britain’s streets is to be welcomed and commended. (Ray Cox, Coat, Somerset, DT, Sep. 9, 2015)
（キャメロン首相が、英国の市街に殺人や暴力をもたらすかもしれない人々に対し、シリアでの積極的行動（＝空爆）を承認したことは、歓迎され称賛されるだろう。）

投書（25）や先に提示した投書（18）の書き手の中では、シリア等から命がけで逃げてくる人々は、イスラム過激派のテロリストのイメージと不可分に結びつき、犯罪や暴力など治安上のリスクというネガティブなイメージを喚起させるものであるようだ。上記以外の複数の投書の中で難民申請希望者は、‘illegal’（不法の）という語とともに言及され、ヨーロッパに到達する人数の多さもあいまって、英国に不法に入国し英国人に不安や恐れをもたらす存在と捉えられているようだ。次節でこれらのネガティブなイメージを語った各パターンの言説について、それぞれの象徴的な例を挙げながら、詳しく検証する。

上記の２パターン以外では、「われわれ西洋人」ではない「他者」が英国に来ることそのものに対する不快さ、すなわち外国人嫌いを露骨に語った言説が１件あった。

(26) [I]t has been the arrival of immigrants from non-European countries that have caused the most negative reaction, exploited – or, if you prefer, articulated – by politicians such as Enoch Powell, the BNP and now most recently Ukip. The easiest way to cut immigration is to exit the EU and see a boom turn to bust. Both may be on offer soon and then all the fretting about foreigners being in Britain will fade away. (Denis MacShane, London, FT, Nov. 1, 2014)

（Enoch Powell や、BNP（イギリス国民党）や、最近では Ukip（イギリス独立党）などの政治家により利用され、あるいは表現された、最もネガティブな反応を引き起こしてきたのは、非ヨーロッパの国々からの移民の到着だ。移入を止める最も容易な方法は、EU を離脱し、ブームの消滅を見ることだ。両方とももうすぐ起こるだろうし、そうすれば英国に外国人がいるイライラの全てが消え去るだろう。）

右翼政党の政治家による激しい攻撃の対象となってきたのは、とりわけ非ヨーロッパからの移民であると述べられている。投書が書かれた時期を勘案すれば、それはシリア等から英国に来るムスリム難民申請希望者への言及である可能性が大きいだろう。投書の書き手にとって、英国にいる彼ら ‘foreigners’（外国人＝他者）は、イライラを引き起こすネガティブな存在として強い偏見をもって表象されている。

3.3. ネガティブなイメージを語った投書の批判的言説分析

難民申請希望者について語られたネガティブなイメージは、上述のように主に 2 パターンあり、それは人種的・宗教的差異に基づいた偏見や差別や憎悪を背景として、彼らと犯罪を短絡的に結び付けるようなものであった。このようにマスメディアを通じて他者を問題のある者、悪として繰り返し表象することは、ムスリム難民申請希望者を留保なしで悪と規定することを自然な行為であるとして正当化してしまうことにつながるだろう。そしてそれはさらなる偏見や差別や憎悪を再生産・強化し、多文化の共生をより困難なものにするだろう。以下では、それぞれのパターンの象徴的な投書を 1 件ずつ提示し、その言説を詳細に分析しながら、誤解や偏見に基づいた論理をもとに、難民申請希望者に対するネガティブなイメージが語られる言説構造の例を示し、その問題点について考察していく。

3.3.1. 投書（27）「難民申請希望者は社会保障の不当な受給者である」というイメージ

[1] If I were found attempting to break into government property, I would quite rightly be arrested, charged and very possibly punished.

[2] However it seems that if I am successful in my break-in, and only then found on the premises, I can expect to be put up in a hotel, fed on a regular basis, given new clothing and paid a generous weekly sum, all for the foreseeable future.

[3] More than ever, the European Union reveals itself to be incapable in a crisis and totally unsympathetic towards the concerns of its citizens.

（Philip J Ashe, Leeds, West Yorkshire, DT, Aug. 3, 2015）

（［1］もし私が政府の所有地へ侵入しようしているのが見つかれば、当然私は逮捕され、告訴され、おそらく罰せられるだろう。

［2］しかしながら、私が侵入に成功し、そのあとはじめて敷地内で見つかった場合、私はほどなくして、ホテルに滞在させてもらえ、食事を規則的に与えられ、新しい服を与えられ、気前よく週給が支払われることを期待してよさそうだ。

［3］ますますEUは、危機における無能ぶりと、EU人民の不安に対する完全な冷淡さをさらけ出している。）

文中で、難民や難民申請希望者を指す語は用いられていないが、この投書が英国に入国する難民申請希望者の状況を皮肉的に語っていると理解することは難しくないだろう。投書の書き手は、政府の保護を受ける彼らの状況に批判的であり、彼らの英国への入国を ‘break-in’（不法侵入）という犯罪と断じ、彼らを不当に社会保障を受ける強欲な犯罪者というネガティブなイメージで表象している。［1］では、‘I’ を主語にして、もし不法侵入を企てたなら、と仮定的に語られ、（「私」を含む）一般の人が ‘government property’（政府の所有地）へ不法侵入しようとすることは、罰せられるべき犯罪であるという共有された常識が確認される。［2］では、それにもかかわらず、（英国領土への）不法侵入という犯罪にいったん成功すると、見つかっても罰せられるどころか、保護され、衣食住に加え手当まで与えられると対比的に述べられる。これは英国に到達した人が、難民申請中には住居や手当を政府から無償で与えられるという状況への皮肉であろう。［2］の主語は難民申請希望者を表すtheyは使用されずに ‘I’ になっており、［1］と［2］は、あたかも「私」が不法侵入をしようとしたが見つかって失敗した場合と、うまく不法侵入に成功した後にはじめて見つかった場合という違いが、当事者（「私」）の行く末を大きく変える、つまり、侵入に失敗すると罰せられるのに、侵入に成功すると（より罪が重そうであるのに）不当に優遇される、と述べるような、誤解に導くような主張が行われる。［1］の実際の主体は（「私」を含む）一般市民で、［2］の実際の主体は難民申請希望者であるため、実際にはその対比は論理的に意味をなさないのだが、書き手は一般市民が不法侵入という罪を犯すことと、紛争による生命の危険から逃れて来た難民が他国に入国することを同列で語るという極端な対比のレトリックを用いながら、英国やヨーロッパへの難民の流入の不安や、無償の社会保障が（犯罪者である）難民申請希望者に与えられることへの強い不満を表現していると考えられる。［3］では、難民流入は解決されるべき ‘crisis’（危機）とネガティブに捉えられ、それに対する ‘the concern’（不安）は書き手だけのものではなく、‘its citizens’（（われわれ）EU人民）の共通の心配事だと主張される。（われわれ）EU人民の不安よりも、他者であ

り犯罪者でもある彼ら難民申請希望者の保護が優先されている不当さに対する怒りは、人種差別と非難されることを避けるためか、難民や英国政府に対してよりも、スケープゴートとしてEU により強く向けられるという体裁が取られている。このような言説や、投書（26）のような言説の流布は、あるいは英国の世論が EU 離脱の方向に導かれるのに影響を与えたのかもしれない。

3.3.2. 投書（28）「難民申請希望者はテロリスト等の危険人物である」というイメージ

[1] News that Germany will accept a record 800,000 asylum seekers this year is alarming.

[2] It is dangerous for liberal European countries to admit too many immigrants with an entirely different way of life too quickly.

[3] Political correctness has prevented a proper debate about immigration, but multiculturalism has clearly failed.

[4] France and Britain, in particular, have admitted large numbers of people who have refused to assimilate.

[5] This has led to alienation and mutual mistrust, with consequences illustrated by events in Tower Hamlets, Rotherham and Paris.

[6] If we continue to ignore these realities, we are sowing the wind and the whirlwind will surely follow.

(Gregory Shenkman, London, DT, Aug. 24, 2015)

（［1］ドイツが今年、80万人という記録的な数の難民申請希望者を受け入れるというニュースは憂慮すべきだ。

［2］ヨーロッパの自由主義国家が、全く異なる生活様式を持つあまりに多くの移民を、あまりに短い期間に受け入れることは危険だ。

［3］PC（政治的公正さ）は、移入に関する適切な議論をするのを妨げてきたが、多文化主義は明らかに失敗した。

［4］とりわけ、フランスと英国は、同化を拒否する人々を多く受け入れてきた。

［5］これは、孤立と相互不信につながり、その結果は、Tower Hamlets や Rotherham や Paris の事件により示されたとおりだ。

［6］もしこのような現実を無視し続けるなら、われわれは風の種をまいていて、当然つむじ風がそれに続くだろう（＝自業自得である）。）

2015年 8 月21日に報道された、ドイツが多数の難民申請希望者を受け入れるというニュースを受けて投稿された意見であるが、投書の書き手は［1］でそのことを ‘alarming’（憂慮すべき）と述べている。書き手にとって憂慮すべきとは、単にその人数の多さの問題を指すのではない。

［2］で、ドイツや英国などの ‘liberal European countries’（ヨーロッパの自由主義国家）にとって、単に ‘many immigrants’（大量の移民）を短期間に受け入れることが危険と述べるのではなく、‘immigrants with an entirely different way of life’（全く異なる生活様式を持つ移民）を大量に短期間のうちに受け入れることが危険だと主張されている。ヨーロッパでの難民申請希望者の多くが、シリア等出身だという事実をふまえれば、「全く異なる生活様式を持つ移民」はムスリム難民申請希望者への言及と考えられる。

一方［4］では、フランスと英国は、‘people who have refused to assimilate’（同化を拒否する人々）を多く受け入れてきたと述べられる。これらの人々が具体的に誰を指すのかは明確には述べられてはいないが、これらの人々の受け入れが、‘events in Tower Hamlets, Rotherham and Paris’（Tower Hamlets と Rotherham と Paris の事件）につながったとの言及が［5］でなされる。英国人の一般読者にはこれらの事件に対する共通認識があるとみられるが、これらはそれぞれ、2015年３月20日ロンドン東部 Tower Hamlets に住む15歳から16歳のイスラム教徒とみられる少女５人のパスポートを、シリア渡航の可能性があるとしてロンドンの高等法院が没収した事件、2014年８月に発覚した、英国サウスヨークシャー州 Rotherham で1997年から2013年の16年間に少なくとも1400人の英国人少女がパキスタン系ムスリムギャングの集団から性的暴行・搾取を受けていたとされる事件、そして2015年１月７日イスラム過激派とみられる犯人がパリの風刺週刊紙シャルリエブド本社を襲撃し12人を殺害した事件[3]を指すと推定される。これらの事件の共通項はイスラム教徒ということであり、投書の書き手は、イスラム系移民（とその子孫）は同化を拒否する危険人物であり、彼らを受け入れなければ英国やフランスでこのような事件は起こっていなかったとほのめかしているということだ。ここでは、一握りの犯罪者や極端な行動をした者の例を持ち出して、イスラム教徒全体を潜在的な悪であると決めつける人種的・宗教的差別に基づく議論がなされ、ほとんどのムスリムは英国やフランスで平和に共存しているという事実を不可視にしたまま、書き手自身のイデオロギーや価値判断に基づく結論、‘multiculturalism has clearly failed’（多文化主義は明らかに失敗した）が［3］で主張され、多文化共存は治安上のリスクというネガティブなイメージで語られる。

またこの言説において注視すべきなのは、故意か無意識かは不明だが、本来意味が異なる、難民申請希望者と移民の同一視がみられることだ。［1］と［2］でその受け入れが危険だと主張されているのは、難民申請希望者であり、紛争などから逃げるため命がけで国を出て庇護を求めている人々である。一方、［3］と［4］で同化を拒否し事件を起こした危険人物とされている人々は、雇用やよりよい環境を求めて移入してきた人々やその子孫であり、ヨーロッパで生まれ育った場合もある。この投書の議論における難民申請希望者と移民の間の共通項は、再びイスラム教徒ということである。すなわち書き手は、「ヨーロッパのイスラム系移民は同化を拒否しいくつも事件を起こした」、だから「イスラム教徒は危険だ」、「難民申請希望者の多くはイスラム教徒だ」、だから「難民申請希望者の受け入れは危険だ」という、偏見に基づいた、

論理的に正しくない議論を展開しているということだ。

［3］で書き手にとっての ‘proper debate’（適切な議論）、すなわちムスリムを名指しし偏見を前面に出した議論は、‘political correctness’（政治的公正さ）のため行えないと述べられている通り、この言説では、文中でムスリムという語を一度も使用することなく彼らについての差別を語るという巧妙なレトリックが見られる。［6］では、‘Sow the wind and reap the whirlwind.’（風を蒔いてつむじ風を刈り取れ＝悪事を働けば何倍もの罰を受ける）ということわざがもじられる。‘we are sowing the wind’（風（＝たね）を蒔きつづける）はすなわち、イスラム教徒を受け入れ続ければ、という意味で、‘the whirlwind will surely follow’（つむじ風が起こる）はすなわち、事件が起こるだろう、という意味であることは読み手の共通認識をもって理解することができ、ムスリム難民申請希望者に対する、書き手の非常に強い偏見が表出されている。

4．まとめ

本稿では、英国の新聞の投書欄におけるムスリム難民申請希望者の語られ方について分析した。難民申請希望者の英国への受け入れに賛成していると思われる言説では主に、1、助けを求める人々は救わなければならないという道義的責任を主張するもの、2、英国は寛大に難民を受け入れてきた伝統があると主張するもの、3、英国に貢献し、英国の利益となりそうな人は受け入れるという国益の観点を主張するもの、の3つのパターンでその理由が述べられていた。これらの議論の背後にあるのは、「彼らより上位にある者」と自らをみなす、英国（人）としてのプライド、白人の責務、ナショナリズムといったものであろうと思われた。一方、反対していると思われる言説では主に、1、英国は国土が狭く人口がすでに多いから受け入れは不可能だと主張するもの、2、限られた国家予算は難民申請希望者ではなく英国民に使うべきだと主張するもの、3、受け入れによってあるべき英国らしさが失われると主張するもの、4、受け入れには治安上のリスクがあると主張するもの、の4つのパターンでその理由が述べられていた。これらの議論の背後にあるのは、自国民中心の視点から、ムスリム難民申請希望者をその人種的・宗教的属性ゆえに他者とみなし、差別や憎悪の感情から彼らを排除しようとする姿勢であろうと思われた。

投書欄で語られる彼らについてのポジティブなイメージは、とても少なかったが、彼らを高度な職業、資格、お金、学歴などを持っている有能な人々とみなすものが複数あった。一方、ネガティブなイメージは主に、1、難民申請希望者は社会保障の不当な受給者である、というイメージ、2、難民申請希望者はテロリスト等の危険人物である、というイメージの2パターンが見られ、それらは難民申請希望者と犯罪を結びつけ彼らを英国に不安や恐れをもたらす危険な存在と捉えたものであり、非ヨーロッパ出身者であるイスラム教徒に対する強い偏見や人種差別が表出されていた。このようなネガティブなイメージは、マスメディアを通じて広く流布されることにより、さらなる偏見や差別や憎悪を再生産・強化し、多文化共生への道のりを

さらに遠くすることにつながるだろう。

結びにかえて、今回分析対象となった投書の中で、難民申請希望者についてのネガティブなイメージが流布している現状への警鐘を鳴らす言説が１件あったので、対抗言説として紹介したい。

(29) Isn't it time we stopped using the word "migrant" to describe people risking their lives to flee a war that has killed 200,000 Syrians, wounded millions (physically and mentally), and made millions more homeless? . . . Surely they are refugees and/or asylum seekers. Defining them otherwise turns them into cannon fodder for our own economic, political and racial xenophobes. (Ivan Rendall, Kings Green, Worcestershire, Guardian, Jan. 6, 2015)

（20万人のシリア人を殺し、数百万人を身体的にも精神的にも傷つけ、さらに何百万人をホームレスにした戦争から命がけで逃げてきた人々を表すのに、「移民」という語を使うのをやめるときではないか？間違いなく、彼らは難民で、難民申請希望者である。彼らをそれ以外の言い方で定義することは、彼らをわれわれ自身の経済的、政治的、人種的な外国人憎悪のえじきとしてしまう。）

この投書の書き手は、多文化社会に生きる英国人にとってだけでなく、寛容さを失い右傾化しているといわれる今日の世界に生きるわれわれ全員にとっての課題を端的に述べている。それは、メディアの言説の人種差別や宗教的偏見の問題に改めて気づき、難民申請希望者が置かれた状況について正しく理解すること、そして彼らを非ヨーロッパ人やイスラム教徒として差別や憎悪の対象としたり、悪、治安上のリスクだと一方的に規定し排除しようとするのではなく、苦境にある同じ人間として捉え尊重する態度を醸成することであるだろう。

注

１．D. Miliband, *TIME*, Dec. 28, 2015/Jan. 4, 2016.
２．この難民キャンプは、2016年10月末に解体された。
３．この投書が掲載された時点では、まだパリ同時多発テロ事件（2015年11月13日）は発生していない。

引用文献

ベッツ、アレクサンダー「21世紀の支援を」『朝日新聞グローブ』no. 177、2016年２月21日 G７面。
パナイー、パニコス（2016）『近現代イギリス移民の歴史：寛容と排除に揺れた200年の歩み』浜井祐三子・溝上宏美訳、京都：人文書院。
三井美奈（2015）『イスラム化するヨーロッパ』東京：新潮社。

Essed, P. J. M. (1991) *Understanding Everyday Racism: An Interdisciplinary Approach*, Newbury Park, CA: Sage.
Lynn, N. & S. Lea (2003) "A phantom menace and the new Apartheid': the social construction of asylum-seekers in

the United Kingdom', *Discourse & Society*, vol.14 (4), pp. 425-452.

Miliband, D. 'Human rights: The refugee flow won't stop in 2016 – unless the world gets serious about fixing fragile states', *TIME*, Dec. 28, 2015/Jan. 4, 2016.

Richardson, J. E. (2001) ''Now is the time to put an end to all this': argumentative discourse theory and 'letters to the editor'', *Discourse & Society*, vol.12 (2), pp. 143-168.

Richardson, J. E. (2007) *Analysing Newspapers: An Approach from Critical Discourse Analysis*, NY: Palgrave Macmillan.

Richardson, J. E. (2013) ''Get Shot of the Lot of Them': Election Reporting of Muslims in British Newspapers', *Critical Discourse Analysis*, vol. 3, pp. 373-394, ed. by R. Wodak, London: Sage.

Richardson, J. E. & B. Franklin (2003) ''Dear Editor': Race, Readers' Letters and the Local Press', *The Political Quarterly*, vol.74(2), pp. 184-192.

Wahl-Jorgensen, K. (2001) 'Letters to the Editor as a Forum for Public Deliberation: Modes of Publicity and Democratic Debate', *Critical Studies in Media Communication*, vol. 18, no. 3, pp. 303-320.

Wahl-Jorgensen, K. (2002) 'Understanding the Conditions for Public Discourse: four rules for selecting letters to the editor', *Journalism Studies*, vol. 3, no. 1, pp. 69-81.